

(11) 俳諧之連歌

天保十四卯歳十月十一日通夜於無為庵興行

人柄もとこやらちかふ骨屋町  
居酒ほしかる跡連の月  
鹿笛のあはれつほくもなかりけり  
ばかり／＼と野分吹出す

俳諧之連歌

芭蕉翁

されはこそ

あれたきまゝの

霜の宿

芦あしををり／＼千菜汁焚いたたく

牛くるま鷹野のうちは休ませて  
はや瀬せを中にわかる口上

けふといふ月をきのふに待明し  
かりやす染の木綿干すなり

蟻とうろうのからかひまけし兜虫かぶと

逢あつふてわかれし昼のつれ／＼  
ほつちりと手箱の紋に蟻の垂

奈良人形の投られて立

暖のん簾まで囁ささやふて春の神まいり

地蔵切出す藪やぶのはつ花

看屋さかなやかほしかる雪の消のこり

つけこみわける帳の合判

五三日革足袋履て眼のかすみ

給仕のすへるかさね卓席

かい干して月に浚さらひし池の水

黄もうすからぬ秋の山吹

野馬取に列卒せのあつまる霧時雨しぐれ

みな粉たはこてひねられもせず  
長い状寐じょうみながら読てかつたるき

難波仕立なんぱは袴ゆきかみしかし

あと継のむすめ引越す懇意先

やせるほとなる暑さてもなし  
霄凌さきよのひらききらすにほろり散

方位を聞いて憂す裏口

三 風 水 風 水 風 水 風 水 風 水 風 水 風 水 風 水 風 水 風 水 風 水 風 水 風 水  
和 外 由 和 外 由 和 外 由 和 外 由 和 外 由 和 外 由 和 外 由 和 外 由 和 外 由 和 外 由 和 外 由 和 外 由

水田 風外 三和 水田 風外 三和

鼎涼 風外 三和 水由 風外 三和

菰こも垂て勝手をかくす仮住居  
やゝともすれば糸図あらそひ  
衣魚の巣て消し曆の巻納め  
仏間のつきはよき日受なり  
ひと筋に粟津の花を直正面  
手ことに汲くみてぬるむ漣さざなみ

海山かいざんもしくれ  
しつまる今宵かな 風外  
かれぬ草凡およぞ

なけれどをはな哉かな

見みへて来る時雨  
かそへるはかりかな 三和  
かれぬ草凡およぞ

なけれどをはな哉かな 水由

かそへるはかりかな 三和  
見みへて来る時雨  
かれぬ草凡およぞ

月か雪かはた花かへり見れば皆

一百五十周追福し参らせんものは  
月か雪かはた花かへり見れば皆

是

祖翁囊のつちやう中の物なり其さやけくいさき  
よくかんはしきにほひを慕ひて忍ふ  
柴の戸にしきる、夜半の軒のしたゝり  
三四ふたつ寂に音して終に一巻となれる  
をいさや一束ねの芻まきにて捻香九挿し  
奉りなを回遊の志もさことおし  
はかられぬれは折しも打くもる雲  
はがみに謹てひと言を加ふ

三和